

國學院大學學術情報リポジトリ

神道の連続と非連続：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, エルマコーワ, リュドミーラ, ブロトンス, アルノー, ランベッリ, ファビオ, エバソール, ゲイリー・L, アントーニ, クラウス, 川村, 邦光, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000504

セッション1

〈発題1〉

神道の概念と初期の歌論のある問題

リュドミーラ・エルマコーワ



【司会（ナカイ）】上智大学のケイト・ナカイと申します。今日、司会の役を務めさせていただきます。慣れない役でいろいろお聞き苦しいことがあると思いますが、どうかお許しください。

最初の発表者は、神戸市外国語大学のリュドミーラ・エルマコーワ先生です。もともと、エルマコーワ先生はボストン大学から学位を取りに来て、ロシア科学アカデミーの極東諸国文学科の学科長を務め、10年前日本に来られて8年前からいまの仕事に就かれました。ご専門は、古代と平安の文学。特に神話と歌論です。



発題

リュドミーラ・エルマコーワ

私の発表がシンポジウムの最初の発表となったことには、少々困惑しております。神道の概念そのものや、その概念の連続性と非連続性という問題に対する最終的な答があるとうぬぼれで言っているのではありません。この発表では予定として、神道概念のある具体的な側面に関して述べさせていただきたいと思いますが、まずはその前に、私がどのような視点から神道を研究しようとしているのかについてお話しさせていただきたいと思います。

学生時代から和歌の起源と初期の和歌の展開に興味を持っており、当時、その前提として文字化された詩歌の起源が多くの点において、第1に、歌謡に結びついていること。また、その起源が古代の儀礼にさかのぼるに違いないということがありました。つまり、研究者によって復元された古代の意識と、古代儀礼の名残そのものが神道であると考えてい

たわけです。恐らくこの前提の基礎は、柳田国男と折口信夫の業績に多くを蒙ったものであり、ある意味でそれは、ロマンチックな民俗学といったような態度でした。その前提に従って、和歌に対する中国文学の影響、仏教の影響を記録しながらも、できるだけローカルな神話的志向と儀礼の実践のあらわれを探して、それを研究の中心に置くべく、『延喜式』の祝詞、『続日本紀』の宣命のロシア語翻訳を行い、その後、『古事記』、『日本書紀』のロシア語翻訳にも着手しました。

ところが、テキストに関する知識が広がれば広がるほど、神道だと思っていた研究対象が皮肉にもおぼろげになっていきました。何よりも不思議に感じたのは、初めて10年前に日本に来たときでした。現代の日常生活の中で、日本人に「神道」という言葉自体があまり使われない。あるいは、私の思ったものと違う意味で使われているということがわかったのです。そういいますのは、ロシアでは「神道」というと若い世代の人からでも、「ああ、日本古代の独特の宗教ですね」という言葉を耳にすることが多いのですが、日本では、「神道」という言葉は神主や国学の専門家は使いますが、若い世代の人が、例えば、私の勤めている神戸外大の学生さんはこの言葉を聞くと、20世紀、30年代の国体のイデオロギーか、本居宣長の思想かというふうに理解するものだと何回も聞いたことがあります。

60年代、70年代から最近に至るまでの日本や西洋の研究の中で神道の概念が大いに見直され、それに関してさまざまに異なった考え方があらわれており、私も古代をめぐるのは「神道」という用語を使っているものなのか。さもなければ「神々の信仰」とか「古代の信仰」といった言い方をしたほうが、より無難ではなかろうかと考えたり疑ったりし始めました。結局、手短かに言いますと、私個人にとって通時的に見れば、「神道」という観念によってとらえられてきた現象は、時代によって、また記述の基礎前提によってはその輪郭を変えたり、姿を消したり、また、あらわしたりする流動的なものとしてしか把握できないものであるように思われるのです。

神道を必要とし、また神道を形づくった背景には、時代ごとのさまざまな社会風潮があったと考えられます。例えばそれは、共同体のアイデンティティや、安定・確立の同語、権力回復の方法、その他を提供するもの。あるいは、仏教と異なった視点、宇宙論や救世の方法を提供するもの。または、仏教を地域の特性により適した形で修正する考え方。時によっては、ただ単に仏教と異なる選択肢を提供する存在が必要なときに、神道がその空白を埋めるものとして持ち出され、また、そのように持ち出されることによって神道は変化してきたと考えられるのではないかと思います。

そして、「神道」という宗教的・思想的なオブジェクトをつくる活動は常に行われており、これこそは連続的なものです。一方、神道を一貫した存在として扱い、その内容を突き詰めて考察しようとした場合、ある視点に立てば、この連続性は確証可能であり、また別の視点から見れば、それは断続的であるように思われます。それゆえ、神道概念の内容をその真性のレトリックの次元に注目してとらえ、議論を立てていく方法論が問題により適しているように思われます。というのは、レトリックの次元。このように言ったところでももちろん問題の解決にはなりません、最近日本でも西洋にも、このレトリックのレベ

ルで研究を行う学者の数が増えてきております。私もその枠の中で、和歌に関わるある面に関して述べさせていただきたいと思っております。

このような研究の中で、メタヒストリーという概念が大変役に立ち、頻繁に使われておりますが、メタヒストリーという言葉の意味は、既に存在している文章に倣って、その形と内容を変換しながら新しい歴史的な文書をつくることをいいます。例えば、『古事記』、『日本書紀』のストーリーからアイディアを借りて、改めて神話のような話をつくることです。ただし、このような後世のナラティブをメタヒストリーといいますが、その場合、『古事記』、『日本書紀』を出発点のヒストリーと考える必要はなくなります。もしこれがメタだったら、これはヒストリーそのものになるのです。しかし、編纂者の意図として多分そうでしたが、創作の過程の面では、『古事記』、『日本書紀』も、やはりメタヒストリーであります。それは、若干の前に存在した資料とか話に基づいてつくられたものです。というのは、この後世にでき上がった、つくられた話をメタヒストリーと名づけたほうがいいのかもかもしれません。

恐らく当時の人にとってみれば、『日本書紀』の言葉を借りて言いますと、時の人にとってみれば、『古事記』、『日本書紀』の構造は、ナラティブの創作とメカニズムのいわば最初の学校のようなものであったと思われます。そして、平安後期と鎌倉時代の作品を検討したら、『古事記』よりも、『日本書紀』にあるストーリーやモチーフを借りて、新しい時代の必要に合ったミュートスをつくるケースがより多いのです。例を挙げれば、『麗気記』もそうです。『倭姫命世記』、中世神道論の多くの文書がこれに当たります。「なぜ『日本書紀』のほうがより多く使われたか」という質問には答えがいろいろ考えられますが、『古事記』と『日本書紀』という1つの作品の共通性と相違点についての解説は、ここで列挙できないほどおびただしい数のものが存在していますので、ここでは、もう1つの解説というより印象を加えさせていただきたいと思います。

つまり、イデオロギーの面で、『古事記』は、より一方的でより具体的。堅くてイデオロギー的ではないかという印象を受けます。その意図は何であるかはとりあえず別にしておきますが、『日本書紀』のほうは、より緩やかでより自由につくられた文章であると思われます。普通、神話は『古事記』、歴史は『日本書紀』とされていますが、実際には、神話の領域においても『日本書紀』のほうがずっと後方です。『古事記』では、コスモロジーの話を天と地が分かれた瞬間から始まっていますが、『日本書紀』は混沌から、こういう段階から始まっています。また、宇宙の発生論も極めて『日本書紀』のほうが面白く解説も多く、その中に、鳥の卵のように未分化の状態から生まれようとする兆し、遊ぶ魚が水の上に漂うごとく空の中にある形をあらわし難いもの、葦の芽のようなもの、海の中に浮かぶ雲のようなフワフワしたものなどいろいろあります。また、『日本書紀』のエクリチュールの可能性も多様で、ここでは時間の関係上詳しく述べられませんが、あらゆるジャンルが使われ、神話の語りと年代記のほうが魔法的昔話、歌物語、叙事詩、ユーモラスなストーリー、言語学、学術的情報などがいろいろあります。このような理知と一緒に沸くというバリエーションに富んでいるシンクレティックな性格を持っている『日本書

紀』は、後のレトリックの変貌と、さまざまな実験によりふさわしいものであったと思われます。

さて、これから初期の歌論における神話的意識のあらわれと、宇宙論風の話の創作の問題に移りたいと思います。それは、神信仰の連続性のあらわれの1つになるかもしれません。まずその前に述べておきたいことは、文字の文化において初めて出てくる「歌」という言葉自体のコンテキストのことです。まず第1に、「歌」という言葉はやはり『古事記』に出ています。それは、太安万侶の序に一番初めに見える2つの段章に関連したものです。2つとも、歌がこの世を超える能力を持っていると確証します。1つは、歌が敵に勝つための魔法的道具として使われた久米族の歌の話です。もう1つは天武天皇が夢で見た歌の話で、この歌は、天武がこれから天皇になることを予言しています。

ただ、注意すべきとてもおもしろい点だと思いますが、『古事記』自体は推古天皇の時代で終わっていて、天武天皇の話は載せられておりません。その序にだけ、この歌の話が出ます。存在していないかもしれません。また、『日本書紀』の中にももちろん「天武天皇紀」があるにはありますが、歌にまつわるストーリーや歌などは載せておりません。機能的には恐らくこの歌は、中国から借りた“t'ung yao”という国家の未来を天皇に予言する歌。日本の童謡、特殊なわらべ歌のことでしょう。ここはまた、神道と同様の問題があらわれてきます。『古事記』と『日本書紀』は神道の当時でしたが、後で神道として思われるようになったか、いつから境界線を引いてもいいのでしょうか。昔の歌はフォークロアに起源をとっているのか、文字化された文章に起源を持っていたのか。また、ローカルなテキストと借りたテキストの境界線をどこに引くのかというような疑問が出てきます。また、当時の人はそれについて何を考えたのでしょうか。

一応は、本題に入る前のいまは前振りのようなもので、ここから早速本題である文化における歌の役割の意味づけ。つまり、歌の神話的誕生をめぐるメタヒストリーについてのお話に移りたいと思います。つまり、歌はいつだれがつくったのでしょうか。最初の文学論のような思想は、広く見れば紀貫之の『古今集序』よりも早くあらわれ、『万葉集』はもちろんですが、芽生えとしては、『古事記』、『日本書紀』にも見出されます。しかし、歌という現象の起源と原理を初めて理論的に説くのは藤原浜成の『歌経標式』でした。この作品は8世紀の終わりに、恐らく、その前に存在していた歌論や中国の思想を踏まえてつくられ、その作品について日本に若干の研究、そのほか、とても詳しい歌論重視の研究がありますが、私の知っている限りでは、この研究の中に宇宙論的な面はまだふれられていません。

まず申し上げておきたいのは、『歌経標式』は浜成が趣向を講じてつくったものです。浜成は、その作品を「歌式」と名づけたとのこと。式」という語には国家の法令集と同じようなステータスが備わっており、少なくとも一般的原理を定める意味だと考えられるでしょう。浜成の歌学書の中で一番主要な点とされているのは、当時の詩歌に関する概念や詩歌に対する欲求であると普通に考えられています。ただし、浜成は私の意見では、貫之の序と違って、文学的批評という目的のほかにもう1つの、より一般的な目的を持つ

ていました。貫之はその序の中で、詩歌の概念の中心に「古」と「今」の和歌の創生、歴史的な事項を起しましたが、それに対し浜成は、『古事記』、『日本書紀』の編纂者と同じように、現象の起源と過去を定める作品を書こうとしたということができると思います。詩歌というものの当時における、いわば正しい働きの規則と、発生の正しい歴史を提示しようとしていたのだと思うのです。貫之も『古今和歌集序』を、和歌の本質、機能と起源と理論から始めますが、それは大まかに言うと、浜成の提示した思想のパラフレーズであると思います。もちろん、貫之の序は130年ぐらい後に書かれたもので、和歌の新しい時代の歌学論、文学的意識の新しい段階を代表しています。

2つを対比してみましょう。浜成は、この意味は漢文ですので、私は読み下しではなく現代日本語訳に近い言葉で伝えたいと思いますので、お許しください。浜成は、もとの歌というものは「鬼神の幽情を感じさせ、天神の恋心をなぐさめるものなり」。貫之は、「鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛きもののふの心をもなぐさむるは歌なり」。そういいますのは、貫之のほうは浜成の漢文の和語の翻訳に近いですが、貫之は、天神のかわりに同住の人、男女の概念を導入します。浜成の場合、すべてはこの世を超える世界で行われており地上に住む人々は活動していません。その後には、貫之は自分なりに和歌の使命を定義しますが、一番初めに述べた歌の機能に関する貫之の観念は、ご覧になったとおり浜成のものとはほとんど一致しており、それを出発点としています。

さて、ここで本発表の主なテーマに移りたいと思います。テーマは、最古の歌の神話のレトリックです。貫之の序と浜成の首記には、いま1つの共通点があります。それは、歌が神代に根をなすという観念です。ただ、歌の最初の創作者、あるいは歌の祖、先祖といえる最初の歌に関しては両者に意見の一致は見られません。浜成は、「龍女海に帰す天孫女の恋に帰す歌を送り、味耜は天にのぼり...雅妙の音韻の始めなり」。貫之は、「しかあれども世に伝はることは、久方の天にしては下照姫に始まり、あらかねの土にはすさのをの命よりぞ送りける」。その文脈の目的を考えれば、実際には、両方が問題としているのは歌の起源を定めることであり、そして、『古事記』、『日本書紀』を基礎にしながら原因論的な物語をつくることです。

その文学にかかわって、まず、なぜこの2つの文章には叙述の神々が名指しされているか。第2の質問は、なぜその神々の選択がそういうふうになってくるのですか。そういう質問が自然に浮かんできますが、答えを出すのは簡単ではありません。浜成が歌の創作者として龍女＝豊玉姫と天孫＝彦火火出見尊と味耜高彥根神の名を挙げるということは、すぐ理解できない選択に見えます。説明がいろいろ可能と思われそうですが、推測の1つを言っておきたいと思います。

浜成が日本史上初めて歌の神話の起源を述べるため、その起源を、既に流布している最も権威のある文章と結び合わせなければならなかったのは当然と思われます。浜成が『古事記』を選ぶのであれば、多分、『古事記』に最初に載っている歌、「八雲立つ...」の歌が最初の歌となったでしょう。しかし、『歌経標式』には「八雲立つ...」は出てきません。そういいますのは、ある理由で、『古事記』は歌の起源を伝える文章として否定されたか

らです。『歌経標式』で想定されている最初の歌の作者からして、浜成は『古事記』ではなくて『日本書紀』の中に歌の起源を探ったわけです。味耜高彥根神を賛美する歌や、彦火火出見尊と豊玉毘売の歌が最初の方の歌として『日本書紀』に載せてあるのです。

なお、「八雲立つ...」という須佐之男の歌の問題も触れないわけにはいきません。伝統的にこれは最初の和歌とされ、歌の歴史の出発点とされてきました。『古事記』では須佐之男の歌は1番目に載せてあります。『日本書紀』にもこの歌は出ていないことではないです。『古事記』、『日本書紀』、歌謡の専門家、例えば、土橋寛氏もその研究、古代歌謡集の日本書紀歌謡書を須佐之男の歌から始めます。また、『日本書紀』には味耜高彥根神の歌謡より先に「八雲立つ...」という和歌が載せてあります。浜成はなぜこの歌を無視しているのでしょうか。実際には、「八雲立つ...」という歌は『日本書紀』の正文に1首もありません。この歌は正文の、「一書云」という小文字で書かれた挿入の形式を持っています。一般に、『古事記』でも『日本書紀』でも「八雲立つ...」が最初の歌とされています。

しかし、そうではなかったかもしれません。少なくとも浜成の歌式の内容からすると、彼は、「八雲立つ...」が載っていない『日本書紀』の文章を踏まえていた気がします。またその場合、浜成にとっては、『古事記』よりも『日本書紀』のほうがより権威があったのだと判断できるでしょう。紀貫之の場合、逆に、須佐之男の趣意が明言されている。ゆえに、『古事記』の権威に訴えるイデオロギーが、貫之の時代に、ある社会グループの中で、あるいは、そういう地域にかけてさらに強くなったという解釈も不可能ではないと思われれます。それはもちろん、もう一度繰り返しますが、それは私の勝手な仮説に過ぎません。

したがって、浜成の活動はまことに国家の神話的歴史の創設の一種であり、機能的には、彼はいわば文学専用の『日本書紀』の継続を書いたと言えます。浜成の目的は、紀貫之の序よりもっと哲学的であり、漢詩と並んで大和歌のレゾンデートルを定めることにあり、歌の神聖の起源を宣言することをねらっていました。また、もう1つの重要な点と思われるのは、味耜高彥根神の歌がまだ短歌の形式を持っておらず、それが歌謡だったということです。このような事実が持っている意味は、つまり浜成にとっては、和歌の歴史は短歌の歴史とは限らなかったということです。

もう時間は少ないですが、ぜひもう1つ述べさせていただきたいことがありますので、ちょっと飛ばしてこれに移ります。浜成と貫之の『古今集序』の間にもう1つ、とても重要な歌学書がありました。それは『倭歌作式』という歌学書で、そこで歌の祖として出てくる登場人物は全く違うのです。これをまた漢文ですので読み下します。「和歌、神の御世より伝はる。而して、未だ章句定まらず、聖徳の御世、隠れたる人文殊現れて、字の定め三十一と択ぶ」。これは、須佐之男でもないですし、味耜高彥根神でもないです。聖徳太子と文殊菩薩の話が急に出てくる。そのような仏教的、念仏集的な和歌の起源論は、ある意味では浜成の列挙した使命に対して論駁的と言ってもよいでしょう。インドで、「言葉の主」、「美しい声」などのような形容詞をつけられた文殊菩薩や、すぐれた仏教歴史的な事情の中では自然な現象であった。聖徳太子を挙げると全く違う世界観、違う宇宙論に

なります。

私の言いたいことを簡単に言うと、貫之はそれとまた違う、また論駁的な考え方を提示するのです。いずれにしても、叙述の例を見ると最初の和歌が何であったか、その創作者、祖がだれであったかという問いに答える神話は奈良時代の末期から平安時代までに唯一ではなく、『日本書紀』と同じように多種多様であり、若干の種類のアイディアと文章として存在していたことがわかります。まあ、私も、メタヒストリーの1つをつくってみましたという感じで終わらせていただきます。

最後に言いたいことをもうちょっと詳しくすると、貫之の序と後世の歌学書を見ると、そのような仏教的といいましょうか、そのような仏教的なアイディアは全く出て来ませんので、和歌の出現を文殊菩薩と結びつける試みは失敗したといえます。この歌学書の枠の中で、その失敗の理由の1つと考えられますのは、文殊菩薩と聖徳太子の選択がかなりミステイクであったことによるかもしれません。『推古天皇紀』に31句の短歌の形をした歌が一首もない上に、その前の天皇紀にたくさん載せてある歌を無視して、聖徳太子にまで和歌の歴史をさかのぼる環境が薄弱だと思われます。『倭歌作式』の作者である喜撰は、具体的なテキストではなく、宗教、イデオロギーの領域に詩歌の根を植えかえようとしたが、古代の文書に基盤を持たない神話は、広い範囲で人気を獲得できなかったのでしょう。浜成も、もちろん紀貫之も、テキストの世界で自分の概念の基礎を探っていたのだといえるでしょう。これで終わらせていただきます。

コメントと質疑応答

【司会（ナカイ）】ありがとうございます。コメントとして、国学院大学 21 世紀研究教育計画嘱託研究員の加瀬直弥さんをお願いいたします。

【加瀬直弥】国学院大学の加瀬です。いま、エルマコーワ先生から歌学書における歌の起源について、藤原浜成の『歌経標式』と紀貫之の『古今和歌集序』を比較しながら、そこに見られる差異を引き合いに出して説明していただいたわけです。ここで幾つかポイントがありますが、和歌というのは極めて個人の感情等が出てくるものと考えられまして、今まで神道の議論の中であまり論じられることはなく、特に古代においては論じられていないと思うのですが、個人における神観念というものがここから抽出されてくる、非常にいいきっかけを先生に作っていただいたと思います。

先生のご発表の中でもありましたように、貫之、そして藤原浜成、その制作年代はどうであれ、それぞれが違った歌の起源の神を認識し表現しているのですが、そこに差異があるといったところからすれば、個人個人がどう神を見るかということが1つ、神道を考える上でのポイントになると考えます。ありきたりの指摘ということになるかもしれませんが、そういった、神に対してそれぞれが思うところがあるといった、その点を大事にしていかなければならないのではないのでしょうか。



そして、実際にその中でそうした認識と密接に関わるのは、『古事記』、『日本書紀』という、その中の記述・筋書きが流布されていたと見られる歴史書です。特に浜成がその筋の取捨選択をしているという事象について、先生が自由な歌のつくり方というものを模索した結果、須佐之男命の「八雲立つ…」の歌をあえて捨象したのではないかという見解を示されたわけですが、それは見方を変えて考えてみますと、何よりも浜成が、神代の世界というものを考える上で何が大事なものであるか。そして、自分が歌の道に生きることを模索していて、その中でどの神をとらえるか。そうしたところから、重要な信仰の対象が何であるかという部分が、個人のレベルで自由に選択できたという事実を抽出することができましよう。

特に『古事記』においては、先ほど先生から、イデオロギー的な側面があるというような指摘がありました。それは1つの考え方だと思いますので、それに則ると、『古事記』には非常に一貫した話の流れがあるものとして捉えることができるわけです。そういった、一方では非常に大きく一貫した流れとして捉えることができるものがある。そしてもう一方では、その個人のレベルでは信仰というものに対する、おのれが信ずるものに対する神の選択ができたという、ここの同時代内での見方の違い、捉え方によって、連続であり非連続であるという切り口がわかり、そして、信仰というものが古代でどういうものであったかということが、良くわかってくるのではないかと思います。

それともう1つ、特に鮮明な論点として出てきたのが、文殊菩薩の話が出てきましたが、仏教との関わりについてです。特に和歌という、最初に述べましたように、人が生きていく上で自分の気持ちを訴えていくものであるという1つの性格があるかと思いますが、その中にありのままの気持ちというものを、仏教からでは人ないし時代によってはうまく見ることができずに、神代の世界の中での議論になってしまうという、そういったもう1つの考え方ができるのではないかと思います。その点に関しては、エルマコーワ先生にお聞きしたい点でもあります。

まとめますと、『古事記』という、非常にまとまった形で時代の流れ、神の流れというのが展開されているものと、浜成のような神への自由な発想が成されていくという、古い時代においては2つの事象があったということがあるわけですが、その関係といえますか、特に、なぜそういうふうな自由な発想ができるのかという点と、あともう1つは、仏教との関わり、仏教が古代においてどういう位置づけにあったのかといったことを、お伺いしたいと思います。

【エルマコーワ】『古事記』『日本書紀』のそういう点に関していろいろ説明がありますが、私は、ある学者の説明を正しいと思うこととか、そういうことに関してちょっといまは言い難いですが、私の感覚では、この両方の全部ではないですが、半分ぐらい、『古事記』も『日本書紀』も翻訳していましたので、何とかこの文章に親しんできて、何とか直観ができ上がったといいいましょか。詳しく述べる余裕がありませんが、『古事記』を読むと、文章はすばらしいのですが、とても具体的な目的をねらってつくられた本という感じが。一体性・一貫性を持っている作品。『日本書紀』を翻訳すると、あまりにスタイルが違う

のです。受動的に、急に、神話的なスタイルから御伽草子のようなスタイルに翻訳も変わっていくのです。後でわかります。

私の感覚では、『日本書紀』はある意味で日本古来文化の実験的工房のような作品で、いろいろな、そのときに中国から借りた、途中で発明していたジャンルを何とかトライしようとしたという感じで、そして、それ以外の目的も若干あったと思いますし、チームワークだったので多種多様です。そして、『古事記』と『日本書紀』は日本古来文化の2つのモデルを進めるという感じで、『日本書紀』は後で、もう1つのもっと新しい時代に合った歴史をつくるときに作られた。もちろん、『古事記』は何とか苦勞した作品で、『日本書紀』はこれを続ける可能性はたくさんありますので。こういうことを私の感覚では、そういう簡単な説明です。どうして『日本書紀』にしたかということです。

仏教のことは、本当に説明し難い点です。喜撰の歌学書はいろいろな面ですばらしい。斬新な歌学書で、それで、どうして31の音節をつくった人は文殊菩薩で、どうしてそれは聖徳太子の時代に初めて起こったということなのか、多分当時のイデオロギー的なファッションだったかもしれません。

枕詞の長い長いリストを載せて、そのリストの前に書いているのは、神代には名はみんな違うものの名でした。いまの歌人は、この神代のものの名前を知らない。それを載せま、載せてあげる。それはどこかにまた出てくるかもしれませんが、私は見たことがないです。それは、神代の言葉といまの人間の言葉との2つの言語が存在しているという事実を認める。それは、とてもおもしろいと思います。それは多くの文化にある現象で、神代のときに違う言語があったのですか。日本文化においては、私は、喜撰以外にどこにもこういう考え方を見たことがないです。

【加瀬】特に今の、1つの現象をいろいろな言葉で語られるという、以前、エルマコーワ先生が別の発表で触れられたことでもあるようですが、その1つの現象に関して世界の神話では標準的に、いろいろな言葉で語られているという、そういった多義性は、特にエルマコーワ先生のご発表で注目を引く部分だと思います。もう1回言い直すと、それはやはり、ありのままという現実と神とは関連することを導き出していることが基本にあると思います。複数の要素を重ねて、1本のストーリーとして、特に、『古事記』のように作ることもでき、しかし、それとは別の姿を語ることもできる。どちらも先生のおっしゃるようにメタヒストリーとすれば、どちらも作り手たちにとってはありのままである。そういったことを考えてみますと、神に対する信仰というのは特に、人々の生活、生き方に密接にかかわっている部分で神に対する信仰があったと考えられるのではないのでしょうか。

特に神と仏の関係で、自分の専門分野にやや踏み込んで説明し、申し訳ない部分もあるのですが、9世紀中頃の、「六国史」の中の『文徳天皇実録』にある神の記述が出て来ます。それは湖の入り口、砂州にある神社の神様です。そこでは湖の口がふさがってしまったり開いたりするという自然現象が記されています。閉まってしまうとその湖は洪水を起こしてしまい、当然、作物が水をかぶって枯れてしまう。ところが開いていると、そういうことがなくうまく水はけができて豊作になります。そして特に重要なのは、その中に「開く

も閉じるもすべて神のおかげである（注：或いは開き或いは塞ぐ、神、実に之を為す・『文徳天皇実録』嘉祥3年8月戊申（3日）条）」といった意味の表現があります。洪水が起きてしまえば当然、特に神道の研究で強調されている、生成力を高めるという側面とは、逆の面も見いだせるわけです。人を危機に陥れる力も神は持っている。その神が持っている力をすべてありのままで受け止めて、それでもなお、生きるために神を信じていこうという、そういう意識が古代においても見えるのです。

これに対する仏教のかかわり合い方はどうでしょうか。そういった人に対して負の側面を見せる神に対して、神自身が罪業を背負っているから救済しようという意識があるわけですが、それを引き合いに出しますと、神への信仰が非常に人の生活に密着していたということが、よりわかってきます。無論それは、1つの形であって、ある特定の地域においては盛んな仏教信仰もあったでしょうけれども、こうした特に生活に結びついたところでの神のあり方から、エルマコーワ先生が今歌学書で導き出した、その起源についての差異といったものが表れてくるというご指摘は、非常に面白く興味深い部分ではないかと思います。

【エルマコーワ】ありがとうございます。もう1つ、もっと正確に言いたいですが、本当に私は神話の話をする予定でこの発表を用意してきました。というのは、神話には、『古事記』とか『日本書紀』には、天と地はどういうふうにでき上がったかと話している。もの原因に関して話している。「屋久島はどういうふうにでき上がりましたか」等々…。しかし、『古事記』、『日本書紀』には、「歌はどういうふうにでき上がったか。だれがこれをつくったか」という話が出てこない。そして、それは後世、もっと時代が下がるのですが、でも『古事記』、『日本書紀』ができ上がって、これを踏まえて新しい神話をつくろう。メタヒストリーのような。そしてこの神話をつくるときに、この神を考えて、仏様を考えて、だれにこの歌の発生を帰するかという、そのようなテーマの変貌に関して私は述べたいと思っていました。

【ナカイ】非常に豊富なご発表でいろいろご質問があると思います。30分ぐらいありますのでどうぞ。前もってお名前と所属をお願いいたします。

【井上】国学院大学の井上です。このメタヒストリーという観点からのお話ですが、仏教的な歌の起源の解釈というのが非常にメタヒストリーとしてわかりやすいところがあるのですが、『古事記』を選ぶか『日本書紀』を選ぶかという、そこでのメタヒストリーのつくられ方の違いと、仏教的なものにするか・しないかという違いですね。その区別の原理は同じ次元でよいのでしょうか。どうでしょうか。

【エルマコーワ】私の主なアイデアといいましょうか、それは、この和歌の起源のさまざまな神話の1つです。仏教の歌ということより大和の歌だということです。『倭歌作式』ですので、それは仏教の歌ではありません。

【井上】いや、仏教の歌ということではなくて、聖徳太子がつくったというふうな説明をすることですね。そのようなメタヒストリーをつくるということと、それから、『八雲立つ』なのだ、「いや、違うのだ」というメタヒストリーのつくり方は、ちょっとどうも、

私は質が違うように受け止めたわけですが...

【エルマコーフ】そうです。実はこれは、ちょっともっと下のレベルに下がって、なぜか藤原浜成は、この「八雲立つ...」を全く思い出していません。ということに関して考えて仮説を出しただけです。でもそれは、そうではないかもしれません。ただ、何か説明が必要だと思って、これは、これではないでしょうかと思ったのです。それは本当に、「八雲立つ」は正文に入っていないからではないかと思いました。

【井上】そこですが、つまり、聖徳太子とか文殊菩薩という名前を、それはもう、私たちは明確な意図を感じ取れるわけですよね。なぜそういう名前を出すか。そのことによる仏教文化、ないし、そういう思想のロジックを使うということですね。でも、ある「八雲立つ」の歌がどれぐらいの広まりがあったとか、だれそれが知っていたか・知らなかったかということは、そういう仏教の人をわざわざ持ち込むか・持ち込まないかということとは、かなり違う性質のメタヒストリーという問題ではないでしょうかという質問です。

【エルマコーフ】多分私は、終わりまで先生の質問がわかりませんという感じです(笑)。どうしてもわかりません。私にとって、この仏教的な面はかなり明らかなです。それは、喜撰は、ぜひ、大和歌、和歌を仏教に何とか結びつけたかったので、こういうことを書いたのです。でも、その前とその後は、ぜひ、この文化の核を成していた『古事記』と『日本書紀』に結びつける必要が意識されたと思います。この歌をだれがつくった。もちろん、この世の人ではなくてこの世を超える存在が歌をつくった。選択は、神か仏か。そして、浜成は神、貫之も神。しかし、違う神。その真ん中に、喜撰は菩薩。文殊。もちろん文殊は、本当に、スピーチという言葉にかかわりのある仏様です。ただ、だれでもいいということではないのです。それは考えて文珠を選んだのです。でも、それは答えにならないと思います。どうですか。

【ナカイ】ほかにご質問はありますか。はい、どうぞ。

【松本久史】日本文化研究所助手の松本でございます。古代歌謡のお話と、それをどう神話化していくかみたいな話だったと思います。多少話を古代から引きずり出してしまいましたが、結局、中世、近世、多少時代を後ろへ下げてしまいますと、例えば、「八雲立つ」における四妙説、吉田神道ですよね。吉田神道がそれをかなり、一種、神秘化する。そういうような作業がございますよね。それから、そのほかにも、例えば柿本人麻呂を神として祀る。そういう運動等があります。それから、近世の真淵の問題になってくると思うんですね。そういう日本の歌というものを考えると、やはり神様に行き着いてしまうのだというような概念、考え方。例えば、8世紀や9世紀にそういう後へ続いていくパターンが形成されたというふうなことで理解してよろしいでしょうか。

【エルマコーフ】それは、ちょっと私が言いたいと思ったことで、それは、連続的であるのは、このメタヒストリーをつくる過程です。その過程を、初めて最初に始めたのは藤原浜成で、藤原浜成はこういう神様を選んだ。そして、どうして選んだかということをいろいろ考えられますが、でも、これはまたこういう文化的活動のモデルになって、あとは、いろいろな変化が起こります。社会的だけではなくいろいろな思想の範囲で、そして、全く

新しいこういう神様の性格が必要になるんです。こういう歴史とかメタヒストリーとか、そういうような活動は普通で、そういうときから、この奈良時代から始まる。

【ナカイ】はい、ありがとうございます。はい。

【アントーニ】ドイツのチュービンゲン大学のクラウス・アントーニです。『古事記』と『日本書紀』とどうして違うのかという点に注目されていますが、『古事記』で大和神話と出雲神話かな、その関係はどうでしょう。それで、その「八雲立つ」の歌は出雲神話のことですね。出雲神話ができて、「八雲立つ」は出雲の枕詞でしょう。そのため、その出雲神話と大和神話の問題が大きいと思うんです。

【エルマコーフ】私はこれについて考えましたが、藤原浜成は『古事記』というのは正式なものとして考えていたと思います。それは、その一番初めに出る歌です。『日本書紀』には豊玉姫命と味耜高彥根神の歌で、これを最初の歌。これはいま存在しているすべての歌の祖と考えて、こういうふうに書かれました。紀貫之は、須佐之男が最初だった。貫之は『古事記』の一番初めの歌、出雲ですから、それは私たちのいまの分析結果として、浜成はいつも、大和...、しかし例えば、藤原浜成はどういう伝説が一番親しいと考えたか、そういうことは私たちは判断できないと思います。

テキストができ上がると、もうこれを完結したものとして取り扱わなければなりません。最初に載せてある歌は作った一族にとっては一番初めにできた歌です。『古事記』は多分、もう国家的な活動です。『歌経標式』は、私記をつくる。和歌のほうでコンテキストをつくる活動です。藤原浜成の活動は。そして、これ以外は彼の興味がなかったと思います。それでナンバーワンだと私は思いますが、間違いかもしれません。藤原浜成の心がわかるのは難しいです。

【ナカイ】ほかにご質問はないでしょうか。あと 10 分ぐらいありますが、ほかに質問はありませんか。

【平藤喜久子】国学院大学COE研究員の平藤と申します。今回のお話をうかがってはじめて『歌経標式』の中では、歌の起源が豊玉毘売と味耜高彥根神に託されていることを知りました。そこで疑問に思ったことは、浜成が『古事記』ではなくて『日本書紀』を選んだということについて、先生は、浜成の個性、個人的な理由によるとお考えになっているのか。それとも、その当時、宮廷の中で歌をつくるときに、日本書紀が典拠として使われることが多かったという理由によるものなのか。そういう状況の中で、自然な流れとして浜成は『日本書紀』を歌の起源として選んだのではないか。

このことは、どちらかに決められる問題ではないかと思いますが、先生のお考えをお聞きしたいと思います。

【エルマコーフ】それは、私の発表の一番曖昧な点と自分で意識しております。それは、まだ私の個人的な考え方、間違いかもしれませんが、それは前に申しましたように、『古事記』は具体的な、とても、明らかに決まっている目的を持っている文章です。例えば、かなり具体的な儀礼に使われる文章かもしれません。これは仮説ですが、『古事記』は使えないということでしょう。もっと新しい中世のメタヒストリーのような文章を見ても、

大体は『日本書紀』を使っているのです。

そういうわけで、藤原浜成はこの2つの文章から選ぶときに、何だか、『日本書紀』のほうが適当ということを経験して初めて判断したらしいです。この元にする文章を選択の範囲で。それはまた、私にとってわからない、謎めいた点です。個性のためだけではないと思います。『古事記』と『日本書紀』の機能的な違い。最終的に、確かにどれもわからない点ですね。でも、『古事記』は多くの場合、使えない文章だった感じです。

【平藤】ありがとうございます。

【ナカイ】質問はいかがですか。はい。

【井上順孝】最初に言ったことと、いまの質問と合わせてもう1回質問させていただきますが、『古事記』と『日本書紀』の性質の違いが、そのメタヒストリーをつくることの違いにかかわるといふ、先生の発想をもう少し知りたいというのが質問の趣旨です。つまり、『古事記』は1つの私撰、前回のシンポジウムである方が、『古事記』は個人の日記であり、『日本書紀』は村の日記である」という、非常に的確な表現をされました。

そうすると、それに基づいてあるメタヒストリーをつくるときに、確かに、『日本書紀』はいろいろな立場があるといふか、いろいろな素材があるので、つくる側は自由につくれるといふことがあるかもしれません。自分の見方に合ったところを選んでといふことはやりやすいかもしれない。でも、『古事記』のほうが一貫しているとすれば、あるメタヒストリーを『古事記』に沿ってつくろうとしたほうがつくりやすいといふか、あるいは、権威、既に『古事記』にはこのようなヒストリーが描かれて、自分はそれをさらに人々に知らしめる。江戸期の国学者などはそういう立場をとる人が多かったようですけども、そういうメタヒストリーのつくりやすさがいつも『日本書紀』の側にあるとは限らない。

そういうことでいうと、いまの説明で『日本書紀』のほうがより自由に元の素材をとれるので、歌論に編成する場合に『日本書紀』を選んだのだという説明がどれぐらい積極的になるのかなといふので、聞いていて逆の主張もできるような余地があつて、そこを先生の元々の発想法、メタヒストリーといふものが説得性を持つ場合の条件みたいなものをどう考えていらっしゃるか。

【エルマコーワ】それも、考えのレベルの話だけになるのです。考え方はいろいろあります。例えば、『古事記』は大宝律令で決まった儀礼の起源を語る作品。『日本書紀』は、そこに入らなかった数多くの神話をつくる。述べる。こういう考え方もあります。そうした解釈はたくさんありますが、私の感覚では、本居宣長が『古事記』を取り、『日本書紀』を否定していても、当たり前だと思います。長い間、『日本書紀』を使っていたので。そして、新しい哲学、思想の制度をつくるために、きのう使っていた文章を否定して、おととい使った文章を中心に置くといふことは文化の流れの中で普通です。私はそういうふうにして、考えてもよろしいかと。本当にこれは確証できないことです。説明は、説得力とか美しいとか、そういうことを基盤にして考えています。確証がないので…。中世の歴史は、『日本書紀』はアクティブに文化の中で活動している感じ。そして、近世に入って全部が変わって…。『倭姫命世記』を翻訳したときに、またこれを考えたのです。『古事記』はど

こですか」。全く跡が消えてしまった感じです。

【井上】もう1つ。なぜ、そこから選び出すかという....。

【エルマコーフ】文化の最初の認められた国家のレベルで、正式に採択された。

【井上】それを選ぶ場合もあるし、別のものを選ぶ人もいるわけですね。それは歴史的に繰り返されてきた。それを、いまはやっている、違うものを選ぶことによってというのは、それは形式的な説明であって、なぜそうしなければならなかったのかという理由の説明にはならないと思うのです。

例えば、国学者が『古事記』を選ぶということは、それまで『日本書紀』がずっと中心だったから『古事記』を選んだほうが新しく感じるという動機では、それは一部の説明でしかないと思うのです。同様に、歌論のどちらを選んだかというの、やはり、もしメタヒストリーというロジックを使うならば、メタヒストリーをつくる人は、つくる理由があるからつくるのです。どのようなメタをつくりたいかというのがあるから。そして、そのときの動機に合わせた素材の選び方だというふうに私は理解しているわけです。

だから、その動機を理解しようとするときの、まあ我々のほうの理解なのですが、先ほどの質問にもかかわるわけですが、非常に個人的なモチーフによって説明しようとする立場もあるし、それは、その時代にそちらの理解のほうがメインストリームになっているから、それに乗ったのだと。まあ、いまの学問でも、例えば、アメリカの学問をやればいいという人もあるし、ヨーロッパのイギリスのほうがやはりいいからという、あるいは、明治時代にはドイツ語ということもありました。だから、そのような時代に影響を受けて選択するその理由を探そうという、そういう立場もあると思います。

【エルマコーフ】きっかけは、それは漢詩と並んで大和歌を、このような神聖的な歴史の中に入れること。この和歌の神聖的な起源の神話をつくるために、当時文化の中で1番権威のある文章を踏まえて、この神話をつくることです。権威のある文章は2つ。そしてこの2つの中で、『日本書紀』はある理由で...、この理由は何ですか、あの本居宣長の話も、『古事記』、『日本書紀』の話も大変多面的・立体的な現象の中の一面で、私も、いまひとつの面だけ自分の考えを述べたのですが、もちろん、これで十分ということは全く言いたくないのです。それで、「これもありますか？」ということを行いました。もちろんそれ以外にも、列挙できないほどいろいろ...。でも、この面に関して話を出していなかったの、で、「これもどうですか？」という、この説明も考慮に入れて考えると、もうひとつの面が見えるようになるのではありませんか？というのが私の答です。

【ナカイ】それでは、これから30分の休憩とさせていただきます。(拍手)